

# 「井伏鱒二著作年表稿」手控え 1

前田 貞昭

## はじめに

筑摩書房の編集者であった故・瀬尾政記氏の手になる『井伏鱒二著作目録稿』（瀬尾環子刊・昭和63年5月24日。以下瀬尾目録と略称する）が刊行されたことをつい最近知った。刊行の事情は、瀬尾目録に付された佐々木靖章氏の「あとがき」に詳しいが、「これまでの井伏著作年譜」の遺漏の多さを慨嘆された瀬尾氏が生前に編まれていたものの内、大正12年から昭和20年の部分が、遺稿の形で公けにされたものである。戦前の井伏鱒二著作目録としては、1990年11月現在のところ、最も詳細なものといつてよいだろう。

瀬尾目録に漏れている著作で、私自身が現物・複写によって確認できたものが以下のようにあったのでここに第一部として報告する。（氏の目録稿は座談会を採録対象にしていなくて、中心は座談会になる。また、私自身の調査よりも、数多くの方から戴いた資料や情報によるものが圧倒的に多いことを断っておきたい。第一部においては、現物・複写によって確認できなかったものについて記載することは、かえって混乱を招きかねないと考えたので、省略した。なお、すでに「井伏鱒二著作年表」(1)に報告しているものについては、標題の後に☆を付して示した）。なお、昭和11年分については『兵庫教育大学研究紀要』11巻に報告する予定なので、ここには省いた。また、内容の詳細や再録書については、今後発表してゆく予定の著作年表稿の該当箇所で触れることにしたい。

他方、当然のことながら、私が作成した「井伏鱒二著作年表稿」の昭和12年から昭和20年の期間(2)においても、瀬尾目録によって補わなければならない著作がかなりの数に上る。瀬尾目録の配布範囲も限定されていたようである上、数点新しい資料も追加しなければならないので、第二部としてここに補遺を掲げることにする（瀬尾目録に掲出されていないものには、標題の後に★を付して示した）。なお、第二部においては、現物確認に至っていないものもかなりあるが、取りあえずの暫定的な速報版という内容でご勘弁いただきたい。

本手控え作成に当たっては、国立国会図書館、日本近代文学館、神奈川近代文学館、大阪府立中之島図書館、同夕陽丘図書館、神戸市立中央図書館、彦根市立図書館舟橋聖一記念文庫、金沢大学附属図書館、滋賀大学附属図書館、京都大学附属図書館の資料を利用させていただいた。兵庫教育大学附属図書館閲覧係・岐阜大学附属図書館参考調査係の利用者サービスによって、各種の資料を利用することができた。今回も、前記瀬尾氏の目録稿以外に、林眞氏、青山毅氏、坂本幸男氏、鈴木貞美氏、関井光男氏、松本武夫氏、堀部功夫氏、牧戸章氏から貴重な資料を頂戴したり、あるいは懇切な御教示を得ることができた。様々な機会を通して賜った御援助・御助言が怠惰な私の大きな励みとなった。『北国新聞』に関しては森英一氏「『北国新聞』文芸関係記事年表稿（昭和篇）」（『金沢大学教育学部紀要＜人文科学・社会科学編＞』、33号・1984年2月、37号・1988年2月）を利用させていただいた。記して感謝申し上げる。

下記以外にも、まだ多くの井伏文があろうかと想像している。書誌的博搜に欠けるという批判や、補遺が多すぎるという批判は甘んじて受ける。現物確認済みにしろ未確認にしろ、私の手元にある情報を公開し、さらに御教示を戴ければ、それをも追加公表してゆきたい。完全な井伏鱒二全集がいつ実現するのか分からない現時点では、書誌的博搜の完璧を期して沈黙するよりも、さしあたっての利便性と現物確認による情報の確実さを目指す方が意義あると考える。どのような些細なことでも、〒673-14 兵庫県加東郡社町下久米972-1 兵庫教育大学言語系教育講座 前田貞昭までお知らせ下さるようお願い申し上げる。

注(1) 磯貝英夫編『井伏鱒二研究』（溪水社・1984年7月10日）

(2) 「井伏鱒二著作年表稿（昭和16年～20年）」（『岐阜大学教養部研究報告』21号・1986年2月）、「井伏鱒二著作年表稿（昭和14年～15年）」（『岐阜大学教養部研究報告』22号・1987年2月）、「井伏鱒二著作年表稿（昭和14年～20年）補遺」（『兵庫教育大学研究紀要』9巻・1989年2月）、「井伏鱒二著作年表稿（昭和13年）」（兵庫教育大学『近代文学雑誌』1号・1990年1月）、「井伏鱒二著作年表稿（昭和12年）」（『兵庫教育大学研究紀要』10巻・1990年2月）。

## 第一部

大正14年1月1日

テリア種のいろいろ \* 翻訳

趣味と科学 1巻1号

P.18-21

無署名。無署名だが、松本武夫氏「井伏鱒二の『聚芳閣』勤務時期」（『解釈と鑑賞』52巻6号・1987年6月）の推定に従う。

大正14年7月1日

つくだにの小魚 ☆ \* 詩

鉄鏈 1巻6号

P.107

『井伏鱒二研究』所載「井伏鱒二著年表」や瀬尾目録では刊行月が6月となっているが、青山毅氏が「文芸同人雑誌《鉄鏈》」（『図書新聞』618号・1988年11月19日。のち、『古書彷徨』・五月書房・1989年3月27日に収録）に指摘するように、7月が正しい。

昭和3年3月1日

新人倶楽部合評会－『文芸都市』其の他に就いて－ \* 座談会

文芸都市 1巻2号

P.65-74

出席者、古沢安二郎・舟橋聖一・崎山正毅・蔵原伸二郎・加藤元彦・丸山清・阿部知二・近藤正夫・井伏鱒二・崎山猷逸。

昭和3年6月1日

新人倶楽部合評会（第二回）－『文芸都市』其他に就いて－ ☆ ＊座談会

文芸都市 1巻5号 P.31-35

出席者、蔵原伸二郎・井伏鱒二・浅見淵・飯島正・前山鈺吉・崎山猷逸・今日出海・近藤正夫・阿部知二・舟橋聖一・崎山正毅・古沢安二郎・徳田戯二。

昭和4年1月1日

心座・新劇協会－合評会－ ☆ ＊座談会

文芸都市 2巻1号 P.51-58

出席者、淀野<隆三>・井伏<鱒二>・蔵原<伸二郎>・崎山<猷逸>・古沢<安二郎>・北園<克衛>・舟橋<聖一>・田辺<茂一>・飯島<正>・中谷<孝雄>・今<日出海>・阿部<知二>・崎山正<毅>・小田<武夫>。本文には出席者名が姓しか示していないので（「崎山正」以外）、< >内に補っておいた。

昭和4年1月1日

文芸都市批判 ☆ ＊座談会

文芸都市 2巻1号 P.74-79

出席者、崎山正毅・井伏鱒二・阿部知二・舟橋聖一。

昭和4年5月1日

文芸都市合評会 ☆ ＊座談会

文芸都市 2巻5号 P.34-45

出席者、久野豊彦・雅川滉・坪田譲治・舟橋聖一・龍膽寺雄・古沢安二郎・中村正常・飯島正・井伏鱒二。

昭和4年7月1日

文芸都市合評会 ☆ ＊座談会

文芸都市 2巻7号 P.59-72

出席者、中本たか子・井伏鱒二・古沢安二郎・阿部知二・今日出海・雅川滉・舟橋聖一・田辺茂一。

昭和5年7月1日

ヘットの匂を嗅ぐ＝お腹が空いてとても困った話＝

朝日

2巻7号

P.196

昭和5年9月1日

最近文学の享楽的傾向に就いて ☆

作品

1巻5号

P.59-63

深田久弥・井伏鱒二・河上徹太郎・小林秀雄・今日出海・永井龍男・中村正常・小野松二による座談会の形式をとっているが、「編輯後記」に「この九月号には大抵の雑誌の合評会や座談会のくだらないのに鑑みて、ただその形式だけを借りて、深田、井伏、河上、小林、今、永井、中村、小野の諸氏に頼んで或る一つの問題——今月は最近文学の享楽的傾向に就いてABC順に書いてもらった。」とある。

昭和5年11月5日

わたくしごと

作品主義

1巻1号

P.13-16

昭和6年6月1日

D でつかい女＝ABC・ナンセンスコント二十六人集＝

文芸春秋 オール読物号＜オール読物＞1巻3号 P.172-174

『オール読物』あるいは『文芸春秋 オール読物号』という雑誌名や巻次について従来の年表類に混乱が見られるようだが、『オール読物』としての巻次は、昭和6年4月1日発行の『文芸春秋 オール読物号』から始まっているので（それ以前は、『文芸春秋臨時増刊オール読物号』として『文芸春秋』の臨時増刊の形を取っている）、ここでは『オール読物』の巻次によって掲出した。

昭和6年8月1日

或る女給の饒舌＝近代女性描写競技（短篇）＝

モダン日本

2巻8号

P.160-161,159

昭和6年8月6日

小林秀雄著「文芸評論」＝新著合評＝

読売新聞 朝刊 19561号

4面

評者、佐藤春夫・川端康成・井伏鱒二・河上徹太郎・瀧井孝作。

昭和6年10月1日

作品の会合 ☆

作品 2巻10号

P.93-97

井伏鱒二・中村正常・吉村鉄太郎・木村庄三郎・河上徹太郎・今日出海・小林秀雄  
の会合の模様を記録した形式をとったもの。

昭和7年1月1日

使徒アンデレの手紙 ☆

小説 1輯

P.134-140

瀬尾目録では、昭和5年11月の初出（初出標題「使徒の手紙」、『婦人サロン』2巻11号）の時点で掲出の上、「のち『使徒アンデレの手紙』（『小説』）第一輯、昭和7.1 芝書店」と改題」と注記してある。

昭和7年1月18日

逃亡記 ☆

小説（年刊） 詩と詩論別冊

P.66-80

昭和7年2月10日

黒い胸像 ☆

文学クオタリイ 1輯

P.231-232

瀬尾目録では、昭和6年11月8日の初出（『大阪朝日新聞』）の時点で掲出の上、「『文学クオタリイ』第1輯（昭7.2.10）に再録」と注記してある。

昭和7年5月1日

結婚報告狂の女=変った女の一生=

婦人公論 17年5号

P.89-91

昭和7年9月1日

自分への吟味

ヌウベル 1輯

P.3-5

昭和7年9月5日

四十雀

あらくれ

2輯

P.14

『あらくれ』は昭和7年7月に創刊され、昭和7年9月に本第2輯が発行されている。そして、昭和8年に入って通巻の第3号（1月）・第4号（5月）・第5号（6月）・第6号（7月）が発行される。そして、半年の空白を置いて昭和9年2月には奥付に「第二巻第一号」と記された通巻第7号が発行されて、以後ほぼ継続的に刊行が続けられている。この「第二巻第一号」と記された奥付を見る限りでは、発行者側の認識は、昭和7年の創刊から昭和8年発行の第6号までを第1巻（あるいは第1次）と見なし、昭和9年2月発行の通巻第7号から第2巻が始まるとしているようである。十文字隆行氏の調査報告（『雑誌『あらくれ』目録・解題』、『昭和文学研究』11集・昭和60年7月25日）のように、創刊第1年を第1巻と数えると、巻号数が第2巻1号から第2巻4号まで重複するのは以上のような事情によるものと考えられる。そこで、本手控えでは昭和8年までに発行された分については、通巻号数を表示し、昭和9年発行分以降については、奥付などに従って巻・号の表示をする。

#### 昭和7年10月1日

純文学の危機に就いて語る ☆ ＊座談会

新潮

29年10号

P.140-162

目次には「純文芸の危機に就いて語る」とある。出席者、杉山平助・河上徹太郎・伊藤整・雅川滉・川端康成・小林秀雄・吉行エイスケ・井伏鱒二・中村武羅夫。

#### 昭和8年1月1日

エスムラルゼなど＝作品中の興味ある主人公＝

文芸首都

1巻1号

P.56

#### 昭和8年1月1日

<無題>＝ファッショと共産党に対する御寸評を乞う＝ ＊アンケート回答

近代

2巻1号

P.23

#### 昭和8年1月1日

<無題>＝のろまで賢いおらが国＝ ＊アンケート回答

人情地理

1巻1号

P.138

井伏は「広島県」に関して回答。

#### 昭和8年5月5日

釣鐘の音に関する研究

あらくれ 4号

P.14-15

昭和8年6月5日

釣鐘の音に関する研究 ☆

あらくれ 5号

P.19-20

昭和8年7月1日

<無題>

ベースボール 4巻7号

P.62

昭和8年7月5日

釣鐘の音に関する研究

あらくれ 6号

P.19-20

目次には「釣鐘の音に関する研究4」とあるが（本文標題そのものには番号は付されていない）、本文冒頭の「3」とある表示が正しい。

昭和8年9月1日

青龍社見学＝秋季展覧会諸相＝

中央美術 (復興) 3号

P.79-80

瀬尾目録では10月となっているが、9月が正しい。

昭和9年1月1日

<無題>＝私の銀座スケジュール＝ ＊アンケート回答

モダン日本 5巻1号

P.55

目次には「私が銀座へ出た時のプラン帳」とある。

昭和9年1月1日

<無題> ＊アンケート回答

P.48-49

新青年 15巻1号

目次には「三四年間答録」とある。

昭和9年1月1日

保険勧誘員＝新春アパート風景＝ ☆

サンデー毎日 13年1号

P.75-78

『井伏鱒二研究』付録「井伏鱒二著作年表補遺」では「新宿アパート風景－保険勧誘員・画家－」、瀬尾目録では「画家（新春アパート風景）」とあるが、「保険勧誘員」が正しい。

昭和9年2月1日

「もんとでら」の記

あらくれ 2巻1号

P.85-87

昭和9年2月18日

増富温泉＝温泉場風景＝ ☆

サンデー毎日 13年8号

P.6

『井伏鱒二研究』所載「井伏鱒二著作年表」、瀬尾目録では「増富温泉場」とあるが、「増富温泉」が正しい。

昭和9年5月10日

噂ばなし（一）

ラ・フウルミ ジイド全集月報 3号

P.1-2

「小林秀雄」、「河上徹太郎」。

昭和9年6月1日

＜無題＞＝愛読書と今夏の仕事＝ ＊アンケート回答

文芸首都 2巻6号

P.122

昭和9年6月15日

噂ばなし（二）

ラ・フウルミ ジイド全集月報 4号

P.4-7

「中島健蔵」、「今日出海」。

昭和9年11月15日

陋巷一叙景

三重文芸（季刊）1輯

P.56-57



昭和10年1月1日

座談会 文学の積極性 ☆ \*座談会

あらくれ 3巻1号

P.37-49

出席者、尾崎士郎・檀崎勤・徳田一穂・阿部知二・井伏鱒二・榊山潤・小寺菊子・  
室生犀星・徳田秋声・中村武羅夫・舟橋聖一・豊田三郎・田辺茂一・小城美知・今  
井邦子・岡田三郎。

昭和10年4月1日

綴方採点=児童文の新採点=

工程 1巻1号

P.56-57

昭和10年6月11日

芭蕉の葉違ひ一念のため申し入れおき候=大波小波=

都新聞 朝刊 17809号

1面

昭和10年7月1日

<無題>=一問一答= \*アンケート回答

女子文苑 10号

P.19

昭和10年8月11日

答=綴方と少年時の思ひ出= \*アンケート回答

工程 1巻5号

P.6

昭和10年10月1日

<無題>=良書推薦= \*アンケート回答

三田新聞 340号

6面

昭和10年11月1日

<無題>=若き文芸志望の女性に与ふ= \*アンケート回答

女子文苑 14号

P.15

## 第二部

昭和12年(1937)

〈無題〉=新春望郷= ★ \*アンケート回答

若草

13巻1号

1月1日

P.111

\*「元旦には氏神様に参拝し、松の内には凧をあげて遊んだ。旧正月だから寒かった。」以上井伏回答全文。

メンタルテスト=ユーモア小説= ★

北国新聞

15804号

1月5日

3面

\*「仲井忠一は五年前に某大学の商科を卒業していまだに就職口の見つからない男である」。「せんだつて彼は新聞広告を見て横井製薬会社に入社試験を受けに行つた」。「この製薬会社の社長は仲井忠一とテニス仲間の親友である」。この親友の社長に何の断りも言わずに受験したために、そんなこととは思ひもよらない社長の計らいで、さも会社側の人間のような顔で面接試験に立ち会ってしまう。結局、受験のことは言い出せないまま、テニス好きの受験者が採用される。「『親友の光はマイナス七光だ』／忠一がさういつて口やしがるのも無理はない、しかも彼は試験を受けないで入社することは恥だと思つてゐる」。

写真=短篇小説=

週刊朝日

31巻4号

1月17日

P.38-39

挿絵・鈴木信太郎。本文末尾に「(完)」とある。\*「かつて私が婦人雑誌の編集部勤めてゐたときのこと、この雑誌の催しごととして東西美人女給写真の募集をしたことがある。」締切日になって早稲田の学生が、渋谷のカンランという喫茶店の女給・八重子が美人だと写真も持たずに、編集部に来てくる。学生の執心ぶりに同情した編集長の指示で、「私」はその学生とカンランまで同道する。そこには、学生と八重子を張り合っているライバルも来ていたが、八重子は、マダムと一緒に店を出てしまう。翌日、学生は、八重子の写真を持参し、編集部ではその八重子の写真を一等当選と決定する。が、その写真は、学生がカンランの近所の写真屋から盗んで来たもので、雑誌に写真が掲載されると、写真屋の主がその事情を訴えに来た。「私」は詳しい事情を写真屋には伝えなかったが、先日の早稲田の学生は、写真をライバルに月二銭の十カ月払いで譲ってやったという。

羽織=娯楽演芸特輯・五分間小説=

東京日日新聞 夕刊 21122号

1月17日

4面

\*「あるとき私が双文(仮名)といふ酒飲み場で酒を飲んでゐると、でつぷり太つて人品いやしからぬ年配の客が、泥酔して私に話しかけた。」次第に二人は親しくなり、とうとう「三つ巴の縫紋の洒落た羽織」を「私」にくれると言ひ出し酔客は、

「衣物や羽織」を無理矢理「私」に押しつけて、姿を消してしまう。双文でもその客の名前は分からない。「しかし今度また双文でその客に逢ったなら」「私」は、その客の着物と羽織に着替えて、相手に気に入ったなら遣ろうと言って返してやろうと思う。

近ごろ聴いた講演＝東日ラヂオ週評＝

東京日日新聞 朝刊 21758号

2月22日

5面

\*聴取者が講演の放送を希望するのが故なきことではないこと、また、最近聴いたラジオによる講演放送についての感想を記す。

酒（田中貢太郎氏）－先輩の話－

大阪朝日新聞 朝刊 19879号

2月25日

9面

\*「私は酒を飲むことを覚えさせた先輩は田中貢太郎氏である。といふよりも私は田中さんを見習つて酒を飲むことを覚えた。震災の年の十一月中旬、私は知人の紹介状を持って初めて田中さんの自宅を訪問した」とき、田中貢太郎は、紹介状を読み終わるなり酒に誘ったという。その田中貢太郎よりも、酒飲みは「早稲田の先輩高木斐水氏」である。「玄関で『ごめん下さい』といふ私の声をよく覚えてゐて、即座に冷酒をお鮎子に入れて持つて出て来る」のである。

憲法館所見＝政治博印象記＝ ★

東京日日新聞 朝刊 21800号

4月6日

3面

本文末尾に「（四月五日）」とある。「写真は憲法館の伊藤公の像」という説明が付された写真と、井伏の顔写真が掲載されている。\*東京日日新聞社・大阪毎日新聞社主催で、旧日比谷議事堂で開かれていた政治博覧会の印象記。

訊問

マツダ新報 24巻6号

6月10日

P.36-39

本文末尾に「（完）」とある。\*「天明五年四月七日のお昼ごろ、伊豆長津呂の或る民家で昼泥棒が捕まつた。」「この泥棒は年のころ四十前後の色の浅黒い大男であつたが、子供のやうに褌も腹巻も締めないで全くの素つ裸であつた。」名主の棧右衛門は異様な風体のその男をいつものとおり取り調べて、問答式の会話体にして書きとめた。男の自供によれば牛窓の船頭長十郎といい、八年前に難破したところを異国船に救助され、便船を得て前夜この近所の浅瀬に密かに上陸したのだという。

三宅島タイメイさん？

横商専文芸？ 11輯？

7月15日？

綴方採点＝子供の文を読む＝ ★

『全日本子どもの文章』厚生閣

9月8日

P.8-10

『月刊文章講座』3巻5号（昭和12年4月5日・臨時増刊「全日本子供の文章」）の紙

型をそのまま使い、上製本として刊行されたもの。「追記」に「本書はさきに雑誌『月刊文章』の増刊として刊行され、(略)需要愈々旺んなるものがあり、かつ製本の恒久性を希望される向も少くないので、茲に改めて上製本として汎く発売するに至つたのである。」と記されている。中扉には「綴方学校編」とあり、奥付には「編著者 百田宗治」と記されている。なお、初出は『工程』創刊号(昭和10年4月1日)である。

森＝創作＝

週信の知識 1巻3号 9月15日 P.10

1巻5号まで3回連載。本文冒頭に「1」とある。本文末尾に「(以下次号)」とある。内容については、以下の連載第2回、第3回を参照。

森＝創作＝

週信の知識 1巻4号 10月5日 P.10

本文標題の下に「前号のあらまし」が掲げられている。本文冒頭に「2」とある。本文末尾に「(次号完結)」とある。「満洲国史蹟見学に出かけた『私』は嫩江上流のK部落を訪れた。三十数年前、『私』の家の作男をしてゐた神田茂平といふ男がここに住んでゐるからであつた。しかしさういふ名前の日本人は居ず、漸く捜し当てたのは『田茂』といふ老人であつて、彼は桃の木の下で午睡をしてゐたが、その風貌は日本人とも満洲人ともロシア人とも見別け難いのであつた。」以上、「前号のあらまし」全文。

森＝創作＝

週信の知識 1巻5号 11月1日 P.12

本文標題の下に「前号までのあらまし」が掲げられている。本文冒頭に「3」とある。本文末尾に「(完)」とある。「満洲国史蹟見学に出かけた序でに嫩江上流のK部落を訪れて、やうやく、『私』は旧い召使の茂平老人を捜ね当てた。対談のうちに私の彼に対する親愛の情は次第に薄らぎかけたが茂平の方では逆に親しみが増してくるらしく、私を誘つて近くの森にある戦友の墓参に出かけ、途々その森を指さしながら、三十何年か前に十七人の戦友がそこで素手で戦つたときの光景を物語り始めるのであつた。」以上、「前号までのあらまし」全文。以下、本号掲載分の内容を\*の後に記す。\*戦争が終結に近づいた頃、ある戦場で敵に包囲された茂平たち三十八人は、最後の突撃をし、敵の乱射の前に全員が倒れたが、そのうち、十八人が蘇生した。しかし、捕虜になつた茂平たちは各個に逃亡計画を立て、最初に試みた茂平が失敗したために、十八人全員が銃殺されることになつた。「どこか人の見ないところで銃殺して河に投げ込むやうに命令されてゐたものらしい。」敵の油断を利用して抵抗を試みたものの、結局茂平ひとりが助かる。茂平はとがめを受けなかったが、「十七人の戦友が銃殺された動起は、考へやうによつては彼の落度であつたともいへるだらう。咎めを受けないのが不思議かもしれない。彼は日本に凱旋しても、ゐたたまらない気持で満洲に引返し、戦友十七名の最後の地のK部落

に定住し墓守のつもりで一生を送ることにした。」

## 昭和13年(1938)

### 固有名詞

福岡日日新聞 朝刊 19527号

1月21日

11面

本文末尾に「(十二月十六日)」とある。『風俗』(モダン日本社・昭和15年6月17日)に初収録。\*「新潮の正月号に載つてゐる尾崎一雄の小説『横田友克氏』を読んで、私はたまたま小説のなかの『私』といふ名称のものの呼び起す連想作用について考へてみた。」小説中の「私」は、作者と重ね合わせて理解されるという、すでに固有名詞の役割を務めているのである。それは、「読者は作品を読むときにも『私』に固有名詞の味をつけてゐる(。)作品に強い刺激を手近かに求めてゐるからである。」事情は、作者の側でも同じである。「マンネリズムになつてはおしまひだが、作者と素材と書くときの気持とのこの三者の立つ一線上において、作者が一元的になり得るにはこれは都合のいい手法である。」

ターキー?

少女歌劇?

6巻2号?

2月?

甲州言葉=創作=

科学主義工業 6月号

6月1日

P.252-260

本文末尾に「(完)」とある。\*「甲州の菖蒲屋といふ一寒村の宿」には、「お志乃といふすこぶる美人の娘がある。」「ところが、この鄙まれのお志乃は、少し耳が遠い上に殆ど啞に近い。」「私」が先日この宿に立ち寄ったところ、宿の主人からお志乃がお寺の坊さんに嫁入りして、里帰りしてきている、ついては、「私」に村の顔役のところへ挨拶に行くときの介添え役を頼みたいと申し出てきた。仲人をした行商の小間物屋が、結婚式の翌日、媒介の手数料を受け取ると、宿賃を踏み倒して逐電してしまったのである。「私」がその役目を果たした翌日、お志乃は、泣きながら宿に帰ってきた。持参金が少なかったので、亭主の坊主に殴られたらしい。「私」は、再び、仲人の代理を頼まれ、坊主と談判しに寺を訪れる。坊主は「無頼漢」というのがふさわしい男で、「私」は不首尾なままに引き上げてくる。宿の亭主は、悲嘆に暮れる娘を慰めている。「私」はそのまま宿を引き払うつもりでいたが、「私」を行商人だと信じている宿の亭主の気だてが気に入らぬ、行商に出るふりをして、近所の山路を歩いて来た。「『商ひは、どうだつたでえ?』/さういふ宿の亭主の質問に、/『上々吉、たいへん儲かつたよ』/私はさういふ返事をするに定めてゐる。すると宿の亭主は必ず上機嫌なのである。」

故郷のない子=作家随想録= ★

ホームグラフ 21号

7月1日

<P.14>

本文には頁表示はないが、グラビア頁も含めて数えて掲出した。＊六つの時に亡くなった「私」の「父の顔かたちや、後ろ姿の恰好や感じなども見忘れてゐないが、声だけは思ひ出せなかつた。ところが先夜父の夢をみて、その声を大体空想することが出来た。」ところが、「私」のうちの三人のこどもたちは、さほど父親を慕っていないように見える。「私」がこどもたちのことを構ってやらないからであるが、「ふるさとのない彼等の身上を不憫に思ふ」。「私のやうに田舎に育つた人間は、子供のころ遊んだ田舎の山川草木がなにかにつけて愉しく思ひ出されてくるが私の子供にはさういふふるさとがないのである。」

#### 岩田君のクロ

ユーモアクラブ 2巻7号

7月1日

P.28-37

挿画・清水対岳。本文末尾に「(をはり)」とある。前稿では現物未確認のところ、堀部功夫氏より複写を頂戴して確認することができたので掲出して置く。

#### 下駄と板草履＝随筆＝

雄弁

29巻9号

9月1日

P.130-133

本文末尾に「(完)」とある。＊「今度の戦時統制で、洋服に下駄ばきの服装も正式の風俗と見なされることになった。」が、「私」が早稲田の学生であった頃は、下駄履きで登校すると大変叱られた。「休憩時間」(『新青年』昭和5年2月)に描いたのと同じ題材を再び書き留めて、「いまでも早稲田鶴巻町あたりの溝のなかには、私の青春の破片の一つ一つが朽ちもせず埋もれてゐるかのやうな気持がする。」と結ぶ随筆。

#### 御坂上

ユーモアクラブ 2巻10号

10月1日

P.34-37

本文末尾に「(八月八日)」とある。前稿では現物未確認のところ、堀部功夫氏より複写を頂戴して確認することができたので掲出して置く。

#### 昭和14年(1939)

#### 級友

早稲田大学新聞 126号

1月1日

4面

＊「私は級友には縁の薄い方だと思つてゐる。」「印象の深かつた級友をよそながら観察し」たことを記憶していて、ときどき懐かしむ。そうした級友の姿を記す。

#### <無題>＝賞金の行衛?・直木賞＝

日本学芸新聞 64号

3月5日

3面

＊「井伏鱒二氏(第六回)」として、以下のような井伏文が掲載されている。「賞金は女房と山分け、勇んで銀座の長谷川へ呑みに現はれると、居合せたお歴々は姿を

くらしめて了ひ、林房雄と新宿の樽平に進出したが、先客の立野信之と林のために忠告され、無理矢理に円タクで帰される。無念やる方なし。友情なればこそ？借金も少し返した。副賞のモヴァード製時計は毎日精確な時を知らせてくれる。そしてお祝ひは菊池（寛）さんにして貰った。」

#### 多甚古村風俗記

マツダ新報 26巻4号 4月25日 P.44-47

発表年代や、「多甚古村」＜本編＞系統の前書きに相当する部分を持つところから、『駐在日記（日誌） 多甚古村』（河出書房・昭和14年7月17日）に収録されるべき部分と考えられるが、『駐在日記（日誌） 多甚古村』はもちろん、『鷓鴣』（河出書房・昭和15年5月15日）所載の「多甚古村補遺」にも収録されていない。＊二月五日付けの多甚古村駐在の日記。夜中の十二時頃泥酔した芸者がやって来る。婚礼の賑やかしに來たのだという。翌日、嫁の近所への挨拶回りがあり、駐在所にもやってきた。

#### 生きる楽しさを

月刊文章 5巻6号 6月1日 綴じ込み(P.104とP.105の間)

泉本三樹著『少年歳時記』（厚生閣刊行）推薦文。＊「文学に対して読者が渴望してゐたものがこゝにある。従來の小説で素材のくらさとエロキューションの難渋に辟易してゐた読者は、泉本氏の新しい小説によつて十分に文学を楽しむことが出来、同時に生きる楽しさを発見出来るであらう。」以上井伏全文。

＜昭和十四年七月一日（土曜日）午後七時！あなたはどこにゐて、何をしてゐましたか？＞？

エスエス？ 4巻8号？ 8月？

#### 昭和15年(1940)

##### 青雀のをぢさん？

創元？ 4月？

##### 三つの茶壺

茶わん 10巻5号 5月1日 P.91-92

＊「書斎の古陶といふ課題であるが、私の書斎は客間と居間と寢室を兼ね、この部屋には古陶は置いてない。」が、「数年前に中国筋へ行つたとき福山市の骨董屋で買つて來た」イミテーションの壺が、床の間に置いてある。鶏卵を持って帰る箱の代わりにした代物である。その他、部屋に置いてある、平野零児に貰った一尺くらいな壺、備前焼の油皿と姫谷焼きの壺の由来について記す。

大隈さんと坪内さん

早稲田大学新聞 190号

10月23日

4面

\*坪内逍遙が「小松原法難」という脚本を朗読したときのこと、また、大隈重信の演説の巧みさを記す。

釣日記

三芸

12月初旬

P.34-36

巻号記載されず、末尾に「昭和十五年七月初旬製版完了したるも」紙飢饉にあつて発刊の遅れた事情を記す一文があり、その末尾に「昭和十五年十二月初旬」の日付があるので、それに従った。\*「五月三十一日」から「六月二日」までの、太宰・亀井を同行者とした釣り日記（宿泊は、谷津温泉南豆荘）。

竹縄？

相撲？

不明

#### 昭和16年(1941)

長耳国漂流記—新しい形態の長篇—

報知新聞 朝刊 23120号

8月4日

4面

\*「『長耳国漂流記』には、蕃人の無智と正直と素朴に対して殆ど生理的と思はれる愛情がそそがれてゐる」とする、中村地平著『長い耳国漂流記』（河出書房刊）に対する書評。

太宰治著新ハムレット

都新聞 日曜夕刊 19332号

8月18日

3面

\*太宰治『新ハムレット』の書評。太宰が、ハムレットの心情をよく把握していること、また、太宰の「抱負感想」を記している。そこで、太宰は、「外国の二流三流の作家よりは、日本の作家のはうが、昨今ずつと進んでゐるのだといふ事を直接に証明したい気持で」執筆にとりかかったこと、「過去の生活感覚を、すっかり整理して書き残して置きたい気持」が事前にあつたこと、しかし、事後においては「自分の現在の力の限界を知」つたと述べている。

高城の跡？

国防教育？

11月？

遊び場の子供たち？

国民六年生？

11月？



## 昭和17年(1942)

敵弾が作った池のほとりにて

写真週報

211号

3月11日

P.23

「わが軍に下つて楽しい日印兵交歓（イポー）」とキャプションの付された写真（この写真については、本文末尾に「（写真は陸軍報道班撮影）」と記されている）が一葉掲載されている。「南航大概記」（筑摩書房『増補版井伏鱒二全集』第10巻所収）の1月8日の項、「郷土部隊」（『オール読物』18巻5号・昭和38年5月1日）、「徴用中のこと」第18回（『海』11巻2号・昭和54年2月1日。ただし、『井伏鱒二自選全集』第10巻・新潮社・昭和61年7月20日に「続徴用中の見聞」として収録の際に削除）に全文引用されている。上記の井伏の回想に従えば、『建設戦』という、マレー派遣の全部隊に配布された日刊紙に掲載されたという。

## 昭和18年(1943)

鐘＝断章＝

毎日新聞 朝刊 24004号

5月5日

4面

\*「今年の正月、福塩線の或る駅に下車すると、ちやうど訪ねようと思つてゐた友人にばつたり会つた。友人はお寺の釣鐘を取りおろす式に出かけるところだったので、それで友人といつしよにその式場に行つてみた。鐘樓の周囲に大勢の人が集まつて、坊さんが釣鐘の方に向いてお経を誦んでゐた。釣鐘は丸太でもつて四方から井桁に縛られて、太い棕櫚縄と轆轤で取りおろす仕組みになつてゐた。友人はそれを見て『あれでは鐘が鳴らないかも知れない』と、不安さうに騒いたが、やがてお経が終つてから果してその通りであることが判明した。先づ坊さんが撞木の綱をとつて大きく振りつけ—とつき試みたが、釣鐘はゴオン、ン、ン、ン……と鳴るべきところ、コツンといふ音をたてた。しかし人々は極めて厳肅にして、笑つたりする人はゐなかつた。坊さんの次に檀家総代である友人がつき、次から次にみんなついた。その度ごとにコツンといふ。しかし笑ふどころではなく、なかには何か感動の涙を浮かべてゐる人もあつた。／＼帰りに、駅の横手に釣鐘がたくさん置いてあつた。みんな鐘の疣のところに淡雪が消え残つてゐた。それ等の釣鐘の銘をいちいち読んで行つてゐるうちに、或る一つの釣鐘に『この鐘は一朝有事の際は献納すべきもの』といふ意味の字が刻んであつた。文政年間の鑄造となつてゐたが、当時の人でもなほこの念願鐘にを刻みつけてゐる。（以上は、いま私の書いてゐる一つの長文より抜粋）」以上全文。「ひかげ池」（『中部日本新聞』夕刊に昭和18年5月13日から7月31日まで67回にわたって連載）もしくは、「鐘供養の日」（『陣中読物』？・昭和18年11月？）が、これとほぼ同内容の記述を持つが、本文末尾に「一つの長文」という表現からは、「ひかげ池」を指すとした方がふさわしいだろう。

昭南の商店街＝南方巷談＝？

発展?

春季号6巻1号?

5月30日?

邂逅=印象に残る兵隊の顔④=

週刊毎日

22年25号

6月27日

P.24-25

挿画・鈴木栄二郎。\*「一昨年の十一月から昨年の十一月まで、私は従軍中にいろいろの兵隊さんに逢った。」「ほんの通りすがりに逢つても、心に湧き起る親しみの情はさらに深いのである。」そうした例として、輸送船で一緒だった兵隊とクルーアンで再会したこと、また、自転車部隊の兵隊でサドルに鶏を下げていた兵隊のことを記す。

### 昭和19年(1944)

シ港陥落前後=固き共栄圏の環3 マライ=

東京新聞 朝刊 486号

2月2日

4面

\*「日本軍に対する現地人の平和協力の気持」を感じた例として、自転車部隊のパンク修理を手伝うマライ人たちを見たことがあげられる。「しかし現地人がことごとく、こちらの思ひ通りに絵にかいたやうに協力の姿を見せるわけではない。」親日的な人間が小さな家に住むのは恥だと言って収入が減ったにもかかわらず、大きな家に住み続け、賃上げを要求するユーラシアンもいたし、どのように協力してよいかわからずに、事務所にいる「私」の世話を無言の内に焼いて帰ったマライ人もいたのである。

二人の才媛?

祖国日本?

1巻2号?

3月?

情感の故郷

定本小波世界お伽噺月報

5号

3月20日

P.1-1

\*「私は子供のころ毎月『少年世界』といふ子供の読む雑誌を購読してゐたが、それはこの雑誌にいつも巖谷小波の『おとぎばなし』が掲載されてゐたからである。」として、「私にとっては、小波山人といふ人は、私の情操の故郷をつくつてくれた人である。」と感想を記す。

昭南日本学園?

中学生?

6月?

山上陣地?

新若人?

9月?